

序

最初日本へ交換学生に行こうと決めた時、半年という時間の中でどんな勉強を、どんな生活をすれば自分の専攻している勉強に役立つかについて悩んでいた。そうするうちに見つけた学科が、「アートと社会を繋げるコミュニケーション能力」を育てる京都造形芸術大学のアートプロデュース学科（以下 ASP 学科）だった。実は私も、おびただしい芸術政策と、数えきれないくらいの立派な芸術の洪水の中、なぜ人々は芸術が与える楽しみや喜びを理解してくれないのだろうか、ずっと頭を抱えていた。そしてその問題に対して、この学科が掲げている「コミュニケーション能力」ということが一つの答えになるのではないかと考えた。この学科で約5ヶ月を過ごした今、私がどんな答えに出会ったかを振り返ろうと思う。

日本へ来た後、ASP 学科の先生方から「Art Communication Project（以下 ACOP）」という特殊な形態の授業を紹介された。しかし今にして思えば、全ての説明を聴いたとしても、授業の全容を汲み取ることは難しかっただろうと思う。なぜならこのプロジェクトは、人と人が面と向かい合って、そして繋がる瞬間を経験してこそ、理解することが可能になるからだ。当初は私も、ACOP は鑑賞者を対象とする美術作品鑑賞会にすぎないものだと勝手に解釈していた。「ACOP は別に斬新でもないし、すでに行われていることじゃないか、こんなコミュニケーションなら既存のものと同じじゃないだろう」と思っていた。大層な錯覚をしていたものである。

一つ目のコミュニケーション —政治経済的な接近—

ASP 学科の学生たちは入学以降、ずっとこのプロジェクトのため、色々な思考のトレーニングや、様々なワークショップを通じて事前の準備をしてきたようだ。そして私が参加した後期では、すでに作品の選定が終わって基礎的な学習を完了した状態だった。後期が始まる時点で約40人くらいの学生たちは三つのグループで分かれて、本格的な練習を始めた。そして12月15日の第3回の鑑賞会を最後にして全てのスケジュールは終了した。

学生の練習は次のように行われていた。平日は基本的に、授業が終わる午後6時から、学校の締め切

りの夜10時までが練習時間となる。約4時間で順番に「ナビゲーション」の練習を行い、以外にも余裕のある学生はカフェなどで集まって追加的な練習をする。それでも足りないなら誰かの家で眠らずに練習を続ける。週末の場合、時間が充分にあるので、練習はなおさら長くなる。このような練習環境は高校を卒業したばかりの学生たちには厳しいものだと思ったが、ほとんど全ての学生たちはこのために個人的な時間を犠牲しながら、熱心に参加していた。

12～13人で構成されている一つのグループはまるで共同体のようになって、色んな役割を分配する。ある人は練習を進行するためのハードウェア、たとえば空いている教室などを確保したり、プロジェクターのようなものを準備する。ある人はグループ内部の連絡、鑑賞会のお客さん（鑑賞者）のリストの管理、教員との連絡体系を担当する。他にもメンバーの練習量、主要な指摘事項などを記録してデータ化する役もある。これら全ての仕事をサポートするマネージャという役割も設けられる。

ここから一番目の「コミュニケーション能力の育て方」が見つかる。役割分担はあくまでグループ内の協議から決められる。各業務が求める能力は何で、その能力を一番そなえている人は誰か？ どんな側面からそのキャパシティを検証する？ 役を与えた時、本人が拒否する場合、集団はそれをどう解決する？ このような他人との意志疎通、つまり異なる環境で生きてきた人たちが、違う考え方の相手と、どう合意点を見出せるかということ、これがコミュニケーションの一番目の課題になる。

このコミュニケーションは役割を決める時点で終わるわけではないのだ。各役の担当者は与えられた任務（公的な仕事）と個人的な事情（私的な仕事）の間、どんな折り合いを選ぶのか、その選択による得と失は何かに関して悩まなければならない。献身的に役割を務める場合、組織の信頼を得ることができるが、その分、個人的な利益（自分の練習のため投資できる時間）は減るかもしれない。この授業の目標は自分の合格及び、成功的な鑑賞会である。さあ、何を取って、何を諦めるのか？それが及ぼす他人への影響はいったい何になるか？プライオリティをどう判断するか？

苦しい条件はこれだけではない。ナビゲーションの練習は一人当たり30分、反省10分くらいを基準として進行される。一日に全員が練習することはできない。ならば、誰が何回練習するのか？ それで目標に近づくのか？ ということも考えなくてははいけない。また、鑑賞者のメンバーが多ければ多いほど、多彩ならば多彩なほど、練習の質は向上する。特に経験が豊かなメンターの先輩、スタッフ、先生が参加する時には効果的な練習ができる。与えられた希少な資源の中で、いかに利益を最大化するか、ということが課題となるわけである。そうだとすると、ただ自分の利益だけを考える人は、このマラソンの終わりまで到達できない。結局、自分がナビゲーションするとき、鑑賞者として協力してくれるグループメンバーとの信頼関係も損なってははいけない。山積みの困難な課題に加え、性別・性格などなど多様な要素が絡まり合い、非常に複雑な関係の中でコミュニケーションすることが求められるのである。成人になるかならないか、という年齢の学生たちにとっては、経験したことのない苦しさに感じられるはずだ。

二つ目のコミュニケーション ―呼号的な接近―

さて、二つ目の「コミュニケーション能力の育て方」を考えるために、ACOPの本質的な話に踏み込もうと思う。ACOPは既存の詰め込み主義の美術鑑賞ではなく、「対話型鑑賞」という方式を取っている。対話型鑑賞は「ナビゲイター」のサポートによって作品を裸眼で「みる」ことから始まる。このサポートは知識の伝達ではなく、促進 (Facilitation) であり、ナビゲイターは促進者 (Facilitator) とも呼ばれる。

ACOPでは、様々な人生を生きてきた人々の視線が作品に投影され、作品から読みとられる意味も個々別々である。そのようにして多様な意見が鑑賞者から生まれてくるわけだが、この時、ナビゲイターはその意見の根拠を求める。それは個人的な経験や、他の分野からの知識の応用かもしれないが、できるだけ作品の中にある視覚要素から意見の根拠をみつけるように促す。そして意見を伝え合い、その話を聞いた人はまた自分なりの考えを広げてそれに同意したり、反論したり、多彩な方式で発展させる。その過程が30分間続いて、鑑賞者たちは非常に楽しい体験をすることになり、その楽しみの根本を認識できる。

鑑賞会において、ナビゲイターは二つのコミュニケーション状況に直面する。一つ目は作家とのコミュニケーションだ。いくらナビゲイターが促進者 (Facilitator) だとしても、もちろん作品については十分考えなければいけない。そのためには、先に説明したACOPの過程を一人ですっと重ねながら、作家が残した記号 (作品) とのコミュニケーションを行うことが必要になる。やがてナビゲイターは自分なりの解釈を見つけてそれを指針とする¹。鑑賞会は、この作家とのコミュニケーションを、鑑賞者と共に行っている状態ともいえるだろう。それが、二つ目の「コミュニケーション状況」である。

「記号」という概念についてももう少し考察を深めてみよう。人が他人にコミュニケーションするとき、自分の「考え」を適切な形態、「声、字、形、動き²」で束ねてそれを表現する。それを「記号」と呼ぶことができる。しかし、この「考え」と「記号」の完璧なシンクロはありえない。つまり、その間の相違があるのだ。これを「ノイズ」³と呼ぼうと思う。ノイズは記号化の時にも、記号の伝達の際にも現れる。

聴き手として記号を解釈する場合も同じである。聴き手は逆に記号からその考えを追跡していき、そこでもやはりノイズは発生する。つまり、どんな解釈も基本的にノイズを含んでいて、唯一の答え (ノイズなしの答え) にはなれない。さらに、もし相手の考えをノイズなしで読んだとしても、その考

¹ もちろんこれはただ一つの解釈に過ぎないわけで、ナビゲイターは他の解釈に対して謙虚な態度が必要になる。それはまさにナビゲイターの成長にも役立つのだ。

² これを言語とも呼び、外国語を勉強することは外国人の間で用いられる記号の解釈の能力を育てるのである。しかし幼い赤ちゃんはただ泣くだけで自分の意思を表現したりする。これもやはり言語 (記号) と呼べるのである。

³ ノイズは記号の短所であると同時に長所でもある。たとえば法律的なコミュニケーションの記号の場合にはできるだけ正確なほうが望ましい。お互いの解釈が異なる法律など恐ろしいものである。しかし芸術作品の記号の場合、あまりにも意味が明らかで想像力の余地がけっしてない作品はつまらなくないだろうか。

えが何なのかを理解できない場合もある⁴。「考え→記号化→伝達→解釈→考え」の全ての過程でノイズは存在するのだ。このような「ノイズ」は「誤解」とも呼ばれるかもしれないが、「ノイズ」を含んだコミュニケーションのプロセスによって、お互いの考え方の差を確認したり、かえって意図以上の結果を呼び起こすこともあるのだ。それは複雑な人間の感情の本質に似ている。そんなわけで、個人的には「ノイズ」を「可能性」と置換することもできると思う。

ナビゲイターはこのコミュニケーションの過程を、作家と / 鑑賞者と、二度行わなくてはならない。さらには、鑑賞者と作家とのコミュニケーション⁵を仲介することもある。そして、それらの一連のプロセスには「ノイズ（可能性）」があちこちに開いているのだ。

鑑賞者が作家の作品（記号）を解釈するにあたって、ナビゲイターは適切な問いかけを通じてその作業を促進したり、作家の考えに関する手がかりや情報を与えたりする。そして、鑑賞者が作品（記号）のどの部分からどんな考えを生み出したのか、またその考えをどんな記号⁶で表現したのかを読みとる。そしてそれを、ナビゲイター自身が行った作家との対話に照らして、およそどんな解釈の段階まで来ているのか、作家ならどう反応しただろうか、解釈の方向が横道に逸れていないか、などを瞬間的に判断することが必要になる。

またナビゲイターは、鑑賞者たちに感情の変化までも感じさせるべきだ⁷。30分という長くはない時間の中でも、作品との対話を通じて鑑賞者の心境に変化があれば、終局にはカタルシスを得ることができるはずだ。それは観客を没入させて感情の変化を起こす「演劇」であるともいえる。

演劇にたとえると鑑賞会はとくに「即興演劇」や「観客参与劇」に非常に似ている。いくら同じメンバーと一緒に練習を重ねても、ひとつとして「同じ鑑賞会」は存在できない。つまり、鑑賞会では即興的な能力で対処することが求められるのである。学生たちは自分なりの演出スタイルを構築して、自分の短所をカバーしたり、鑑賞者へ働きかける工夫をしたりと、試行錯誤する。

鑑賞者たちは、ACOPでドラマを経験した後、芸術に対して興味を感じ、それを考え続け、最後には芸術の消費者、いや芸術の同伴者になるのだ。とくにこの鑑賞法を幼い時からずっと経験しながら育つとコミュニケーション能力、芸術鑑賞能力が発達するのは明らかだと思える。

結

「コミュニケーション能力の育成」ということについて、強い興味と好奇心を持って日本に来た私は、ACOPを通じてその教育が非常に効果的に行われていることを経験した。そして、ACOPは、芸術が

⁴ たとえば、視覚的に不便のある人にはいくら色彩に対して説明しても、彼はそれを理解できないだろう。

⁵ しかし本質的に、ただ記号だけを残した、黙っている作家とのコミュニケーションと、今日の前で即座に動く人とのコミュニケーションは根本的な差があるはずだ。

⁶ 鑑賞者が用いられる手段は声、動きぐらいかもしれないが、それでもナビゲイターにとっては充分である。

⁷ しかし、心境の変化自体は目的ではなく、それは一連の鑑賞の結果に連れてくる副賞のようなものだ。それぐらい鑑賞者の心に近づくべきだ、という意味である。

直面している様々な課題の解決に貢献することはもちろん、人々を幸せにすることにも力を発揮できるという確信を得た。

実は私は最初、日本語の勉強になれると思いながら練習に参加した。最初には作品について話すことは難しかったし、私の発言がむしろ彼らへ迷惑をかけているんじゃないかともずっと心配していた。でもこつこつ参加を続けることで、様々な日本語はもちろん、学生の考え方、そして彼らが生きてきた人生の一面を共有できる機会を得ることができた。また、美術に対する距離感が狭まり、何より私自身の中で、物凄い変化を感じている。ここまで来るために、様々な助力をいただいた。とんでもない意見を傾聴、尊重してくれた学生たち、そしてこんな私も、彼らの役に立てるのだという確信を与えてくださった先生たち、スタッフさんたち、そして私の人生の中、こんな貴重な経験をさせてくださった二つの学校にも深くお礼を言いたい。